表紙　モントリオール・オリンピック大会はいよいよ七月十七日に開幕。そこで今号は大会の準備や諸施設、モントリオール市、カナダ選手の訓練状況などにスポットを当ててみた。記事は三―六ページ。

より広くより深い相互理解のために

■日加協会会長　近藤晋一

一九七四年九月の田中・トルドー両首相の共同声明は、「日加両国が今後さらに政治、経済、文化、科学技術等多岐にわたる分野で協力関係を育成拡大し、もっと日加関係の基礎を一層幅広く、深みあるものにすることに同意した。両者はかくして日加関係の新時代の幕が開かれることを希望した」と述べている。これは従来日加協力関係が経済貿易の分野のみに集中していたのを、より多角的な分野で発展させようとの方針を示したものである。そして日加関係において「新時代」の扉が開かれるか否かは、両国政府の今後の努力もさることながら、基本的には、日加両国の国民的基礎の上に相互理解と親善関係を築き上げることにかかっているといえる。

日加関係の緊密化に伴ない、両国の各分野での交流も盛んになっている。政府間では日加閣僚委員会の定期的開催や事務レベルでの各種の協議が行われている。カナダの州政府も東京に駐在員事務所を設置したり、政府使節団を訪日させている。カナダの連邦議会と日本の国会の間でも議員団の交流が始められている。また各種の民間使節団の相互訪問も次第に活発となっている。カナダを訪れる日本人の観光客の数も年々増加し、昨年は九万人を越えたといわれる。

このような日加両国の国民各層の交流の活発化は、相互理解と親善の増進に寄与しているし、歓迎すべきことであることは言うまでもない。しかしながら、日本のカナダに対する関心と理解、またカナダの対日関心と理解は、双方の国民の間に広範にまた深く浸透しているであろうか。わが国でカナダに関心と理解を抱いている人々は、カナダと商売上の関係をもつ者、カナダに在勤した者、カナダに観光旅行をした者など限られた範囲に止まっているのが実情である。日本のマスメディアにしても、時々発行されるカナダの特集号を除き、カナダに関して報道することは極めて稀れであるし、日本の大学、研究機関においてカナダ研究を専門にしている者は十指にも満たないであろう。日加関係の「新時代」が外交的辞令でなく、実質的な成果を挙げるのには、まだ前途遼遠といわざるをえない。

日加両国民間の理解と親善の増進を目的とする日加協会は、わが国に数多くある友好団体の中でも歴史の古い団体のひとつである。この協会は、日加両国が外交関係を設定した一九二九年の翌年発足した。第二次世界大戦中はその活動を中止していたが、サンフランシスコ平和条約成立後、一九五二年に再建されて今日に至っている。現在日加協会の会員数は、個人会員一五二名、法人会員一二六社にすぎないが、日加協力関係の促進に関心をもつ日本及びカナダの人々を中核として、その輪を逐次拡げることによって、両国民間の相互理解と親善の増進に貢献することを念願としている。

日加協会の主な活動は、(1)カナダ連邦及び州政府の首脳又は使節団の訪日に際して、日本の民間人との交歓の機会をつくること、(2)在日カナダ企業及びカナダ人との交流を促進すること、(3)カナダ事情に関する資料の提供と講演会を開催すること、(4)カナダとの文化、教育の交流を斡旋すること、(5)カナダに所在する対日友好諸団体との交流をはかること、(6)日加協会の会員相互の親睦のため各種の催し物を行うこと等である。卒直に言って、日加協会の財政的基礎がいまだ充分確立されていないために、協会の活動は満足すべきものであるとはいえない。しかしながら、日加協会はその限られた能力の範囲内において最善の努力をしている。協会はその事業活動の実施に当って、わが外務省及び在京カナダ大使館と常時緊密な連絡をとると共に、関西日加協会及び昨年設立されたカナダ実業人協会とも協力している。

本年七月にモントリオール市でオリンピック大会が開催され、秋にはトルドー首相夫妻の訪日も予定されている。したがって、一九七六年は日本のカナダに対する関心が高揚し、両国の協力関係において新たな道標が築かれる年となることが期待されている。日加協会も、今夏外務省と在京カナダ大使館の後援の下に、四十名にのぼる親善使節団をカナダに派遣することとなっている。この使節団が訪問先の主要都市でカナダの友人達と交歓し、日加親善の成果を挙げることを希望している次第である。

（近藤氏は元駐加大使）

カナダ建国記念日を迎えて

■駐日カナダ大使　ブルース・ランキン

カナダは七月一日、建国百九周年を迎えた。この百九年の間に、わが国は北米大西洋岸にあった四つの植民州から、三つの大洋にまたがり、世界第二の面積をもつ一国家へと発展した。また、産業形態も、農業と資源中心の経済から国内および海外向けの高度な製造加工業に重点を置いた経済へと変遷し、外交関係もこうした発展と軌を一にして拡大してきた。

太平洋国家カナダのアジア、特に日本に対する関心は古い。日加間の接触は百年以上にさかのぼる。来年は長崎県出身の永野万蔵氏が日本人としてはじめてカナダに渡ってから百年目に当たり、カナダではいろいろな日加関係団体が記念行事を計画している。過去一世紀の間に、日加関係は経済、政治、文化的に飛躍的に増大した。日本はカナダ第二の貿易相手国で、二国間の貿易額は往復で三十五億ドルにのぼる。一九七四年に会談した日加両首相は両国の協力関係を一層増進し、かつその基盤をさらに幅広く、深みのあるものにする、との希望を表明した。以来、両国政府は今後一層の協力関係を大きく約束するいくつかの経済領域を洗い出し、これらの領域について積極的に取組んでいる。

こうした協力関係は、経済の分野だけに限らない。両国は国民間の相互理解を深めたい意向であり、その意図をふまえて文化、学術交流を奨励し、かつお互いの国についての知識を広める努力を続けている。

今年は特にオリンピック大会がカナダで開催される年でもあり、多くの日本人がわが国を訪問し、また訪問しない人びとも新聞やテレビ、ラジオを通じてカナダについて知る機会が多いと思う。こうしたことを契機に、できるだけ多くの日本人がカナダに対する関心を高めることを期待したい。

本紙も今号で発行一年になる。本紙を通じて、読者各位がカナダ社会の諸面について知識をふやし、またカナダとカナダ国民についてもっと理解を深めたいという気持になったとすれば、これ以上のことはない。今後とも、ご愛読を希望する。